

J.J. ライン著「中山道旅行記」邦訳（その5） —信濃を横切る（2）鳥居峠から和田峠まで—

山田直利¹⁾・矢島道子²⁾

【訳者まえがき】

本邦訳は J. J. Rein (1880) の「中山道旅行記」(独文) を全訳し、それを(その1)～(その7)の7篇に分けて掲載するものである。原論文は「章・節」のほかには見出し語がなく、段落間の文章も長いので、邦訳では新たに見出し語を設け、またなるべく短く段落を入れた。原論文の脚注は、邦訳では原注として各章・節の末尾にまとめて配置した。訳者による注は訳文中の括弧〔 〕内に記入したほか、別に訳注を設けて原注の次に配置した。さらに原論文・原注・訳注に引用された文献のリストを章・節ごとに載せた。なお、原論文には多数の植物の学名が載っているが、邦訳ではすべて原文のまま使用した。

2. J.J. ライン著「中山道旅行記—著者自身の観察と研究に基づき、E. クニッピング氏の路線測量に従い、その覚書を利用した—」全訳（つづき）

2. 4 信濃を横切る（原論文のⅢ章）

2. 4. 1 鳥居峠から和田峠まで（原論文のⅢ章2節）（第9回）

<犀川>

我々が鳥居峠で目の前にしている中山道の区間は、犀川流域および諏訪湖(天竜川)流域に属し、それ故に河川水を半分は日本海へ、半分は太平洋へ送っている。この区間の地域的な特徴は、地質学的な基盤の特徴と同様に、木曾街道のそれと大きく異なっていない。街道は、鳥居峠から洗馬まで、あるときは犀川〔奈良井川〕の左岸に、あるときはその右岸に延び、全体としてこれまでの北北東の方向を保ち続けるが、洗馬からは諏訪湖畔の下諏訪〔原文では Shimonosuka〕まで、向きを東方へ変える。それに対して犀川は、洗馬からはむしろ北の方向を取り、その谷底は、信濃・飛騨間の巨大山脈〔飛騨山脈〕が前方へ張り出したその東麓となっている。同山脈からは水量豊かな多くの支流〔梓川、高瀬川など〕が流れ出している。犀川は、〔明科で〕ふたたび本来の北東方向に戻った後、最後に北信濃

で、日本のもっとも重要な川である千曲川に合流して大河となる。それ故に、我々は鳥居峠を踏み越えたことよって、「三大河」*1の2番目〔信濃川〕の流域に入ったのであり、そして他日、我々が碓氷峠に背を向けたのちは、日本の「三大河」の3番目〔利根川〕も詳しく知るようになるだろう。

<奈良井>

鳥居峠から1.5里離れた奈良井宿までの下りは、木曾谷への下りよりもずっと緩やかである。街道はまず多数のトチノキ(*Aesculus turbinata*)の前を通りすぎる。トチノキは、通常奥深い山林の中でブナ、モクレン、ハリギリ、カシ、カエデなどの落葉広葉樹と高さを競い合うが、ここ〔街道沿い〕ではのびのびと美しい姿を見せている。これはその形からもっぱら *Aesculus Hyppocastanum*〔セイヨウトチノキ〕を思い出させ、観賞樹としての価値ではアメリカトチノキよりはるかに優れており、そのため栽培をぜひ推奨されてよい。

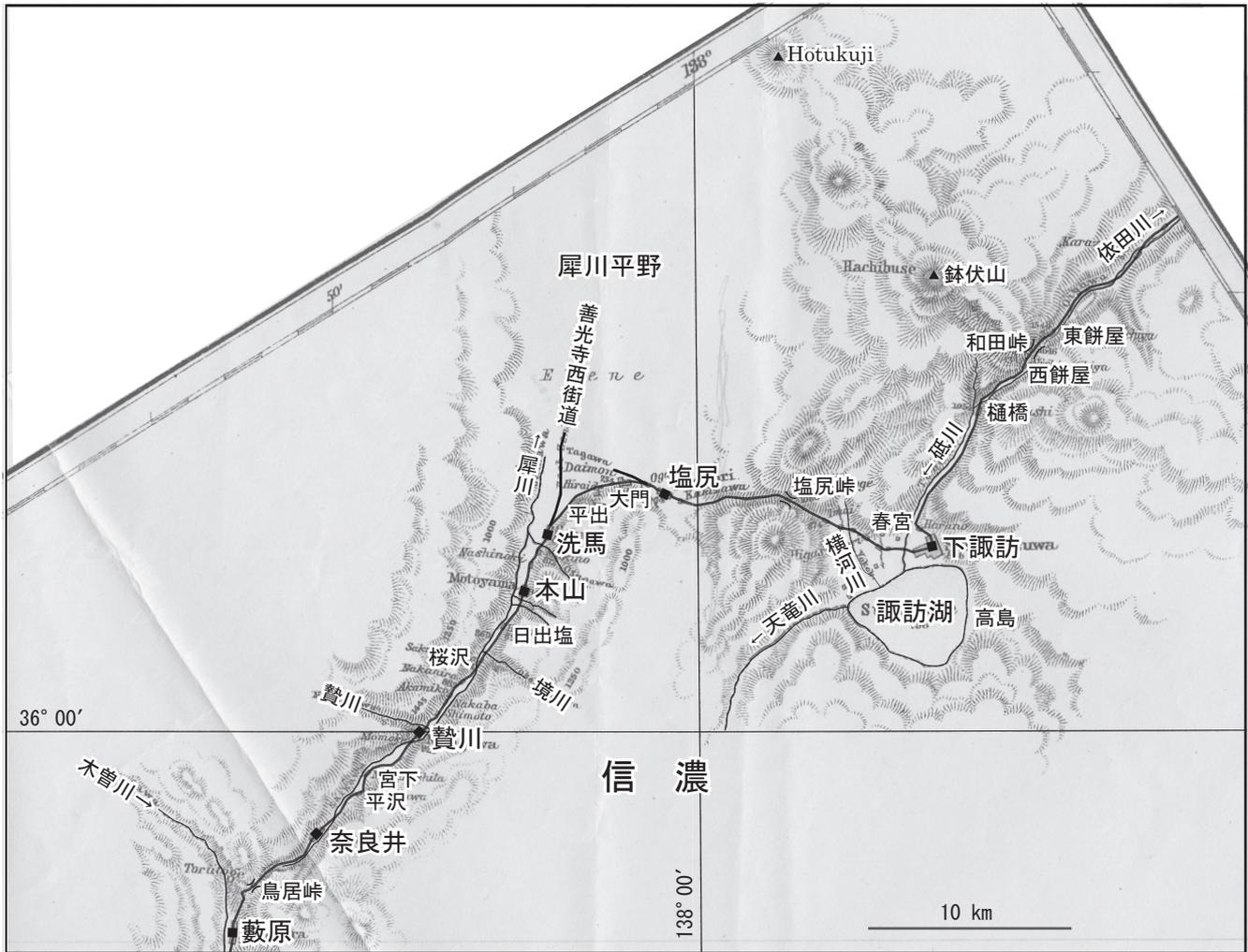
我々はいま、深く刻まれた犀川の谷を、大抵は森の中を通って、奈良井へ向かって下りて行く。奈良井では、藪原〔原文では Nagohara〕と同じように、多くの木材加工業、おもに櫛挽き〔いわゆるお六櫛〕が営まれている。信濃の国には、ツゲ(*Buxus sempervirens*)、イスノキ(*Distylium racemosum*)およびツバキ(*Camellia japonica*)のような、より温かい地方の堅い木材が不足し、交通手段が粗悪なため海岸地方から手に入れることは困難なので、人々は近隣の山林のシラカンバ(*Betula alba*)、ズミ(*Pyrus sp.*)およびその他の多くの木で間に合わせねばならない。

奈良井と洗馬の間の快適な街道は、上り下りが非常にゆるやかで、旅の一日行程の間中、魅力的な狭い犀川の谷の中にある。山々は灌木林、広葉樹林および針葉樹林によって蔽われ、花崗岩質基盤上*2の頁岩の長い山稜からなり、多量の珪岩〔チャート〕およびグレーワック〔泥質基質に富む砂岩〕を伴い、そしてあちこちで火山岩の岩脈によって貫入されている。ここにはまた針葉樹のもつ

1) 地質調査所(現産総研 地質調査総合センター) 元所員

2) 日本大学文理学部

キーワード: ライン, クニッピング, 中山道, 信濃, 地形, 地質, 植物, 動物, 養蚕, 犀川, 鳥居峠, 松本, 碓氷峠, 諏訪湖, 和田峠



第9図 中山道路線図5。(鳥居峠—和田峠)

Rein (1880) の付図II「25万分の1中山道旅行路線図—加納から下諏訪まで—」の東部を基図とし、その上に中山道六十九次の宿駅名をやや大きな字で、その他の地名をやや小さな字で和名表記した。

とも卓越した樹木として、*Chamaecyparis pisifera* [サワラ], *Ch. Obtusa* [ヒノキ], *Cryptomeria japonica* [スギ], *Abies firma* [モミ], *Pinus densiflora* [アカマツ] および *P. Massoniana* [バビショウ] が、そしてときどきは稀有なヒバ (*Thujopsis dolabrata*) が多く出現する。しかし、広葉樹のなかでは、相当な規模のブナ、トチ、クリおよびカエデならびに多種の落葉カシが、とくに際立っている。つる植物が力強くそして多種類出現するこの森のさまざまな色彩は、とりわけ目を楽しませる。養蚕はここでもまた住民のおもな職業となっている。宿駅地には多くの宿屋があるが、街道には人通りは少ない。

＜にえかわ 贄川＞

奈良井から半里で、我々は木材および漆工業が非常に盛んな平沢村¹⁾に着く。ここで製作される製品は日本の家

庭の需要によるもので、輸出のためのものではなく、質素、廉価、堅牢そして実用である。平沢を後にしてまもなく、我々は小さな村、みやのした宮下を通過し、それから谷が少し広がったところに入る。それは半時間後にはふたたび狭まり、ももおか桃岡 [原文では Momoke] では山々が川の両側にふたたび密に接近し、中山道はふたたび犀川左岸側へと移り、ここで贄川の宿駅のある、犀川のすぐ上の日当たりのよい高まり [河岸段丘] へ上る。ここで、近隣の森の中での狩猟についてのクニッピング氏の覚書を引用しよう。

「ここ(贄川)では、できることならいくつかの遠い山頂を測量するために、半日の休養日を使って左岸側の高みへの登山が行われた。ニムロド [バビロンの狩猟の神] のような頑強な老人が案内役を買った。贄川の背後の山地では、一日中歩き回っても人の住家を見ることはない。荒れた小道のそばで猟師たちが木の枝や灌木で作った貧相な小

屋は野営用に使われ、そこでは朝になると同時に猟師たちはけものを見張る。イノシシはたくさんいるので、貧しい人たちは少なくとも冬にときどきはその肉を手に入れられる。原始的な火縄銃と短刀がこの猟師たちの全装備である。我々はすでに1時間も登ったのだが、町はあたかも我々がその場所から来なかったかのように、我々の下のすぐ近くにあった。待望の山頂の1つ1つが姿を現わした。我々は最後には御嶽が見える高さに達したのだが、雲がふたたびそれを隠してしまった。」（クニッピング）

<飛驒への道>

「飛驒およびそれに隣接する信濃・美濃の区域は、日本の最も未知の部分であるように思われる。島〔本州〕の他のほとんどすべての国々は、すでに1人あるいは別の外国人によって踏破されているが、飛驒に関しては何も知られていないのも同然である²⁾。ある日本の地図によれば、東から3本の道が飛驒へ通じている：御嶽と乗鞍の間に2本、すなわち、福島からの（黒川谷を通る）道〔長峰峠越え〕と、藪原からの（木曾谷を通る）道〔野麦峠越え〕が通じており、3番目の道は乗鞍の北方で、犀川平野〔松本盆地〕（地図の洗馬北方を見よ）からの道〔安房峠越え〕が通じている。」（クニッピング）

<本山>

費川から本山への2里の道程は、始めの半分が〔犀川の〕左岸側にあり、それから右岸側に移る。その移行は桜沢の近くで見られる。桜沢は高まり〔段丘〕の上にある小さな住居群であり、そこでは2軒の広い宿屋で旅行者に毛皮が売られている。旅行者はここで近隣の山林での豊かな狩りの機会を待たねばならず、また狩りの主な対象をよく知らねばならない。それらは猿すなわちサル (*Inuus speciosus*)、黒熊すなわちクマ (*Ursus japonicus*)、穴熊すなわちアナグマ (*Meles Anakuma*)、狐すなわちキツネ (*Canis vulpes*)、浣熊すなわちタヌキ (*Nyctereutes viverrinus*)、鹿すなわちシカ (*Cervus Sika*)、^{あらいぐま} 羚羊すなわちカモシカ (*Antilope crista*) および非常にありふれた広く分布するイノシシ (*Sus leucomystax*) である。それらに、野原に棲む鳥類のうち、その鳴き声をいたるところで聞くことができるキジが仲間に加わる。

日本の皮なめし業はまだ始まったばかりなので、残念ながら毛皮は粗悪品である。以前は、毛皮を扱う人々ならびに一般に毛皮を剥ぐ仕事についている人々は不潔であるとされ、軽蔑されるべき最下級層、エタ〔原文のまま〕に属していた。彼らに対する偏見はなお完全には消えていない。

我々が桜沢を去ってのちすぐ、私の人夫の1人は、街道のすぐそばのそのようなエタの家の中へ行って私のために一杯の飲み水を貰って来るのを拒み、彼は私に次の機会まで渴きを我慢するよう懇願した。

ここから近いところで、私は幼いムササビ (*Pteromys Momonga*) を買う機会があった。昼間は高い樹幹の中で眠って過ごし、これに対して夜間は元気に木をよじ登り、飛び跳ね、ウサギのように生きているこの可愛らしい小動物は、ここではマメウサギと呼ばれており、他方で、たとえば日光山地では、彼らはモモドリと呼ばれている。

桜沢を過ぎて間もなく、我々は犀川の右岸支流の境川〔原文では *Osakaigawa*〕を渡るが、そこから谷は次第に広くなり、同時に街道は川筋から右方に離れ、立派な宿駅、洗馬を後にして、最後は〔犀川から〕分れる。中山道はここで東へ曲がり、塩尻に向かって次第に上り坂となるが、一方、我々の略図が示すように、第2の道は犀川の右側を、それから次第に大きく離れながら「善光寺に向かって」続いている。

<松本>

我々は少しの間中山道と別れ、なお数時間、これ〔善光寺西街道〕に沿って進むと、我々は高原に入り、郷原〔現塩尻市広丘郷原〕、野村新田〔同広丘野村〕および村井〔現松本市芳川村井町〕を過ぎて、松本の町へ着く。この町は信濃で2番目に石高の高い大名、松平丹波守、いわゆる戸田松平^{とだまつだいら}のかつての居住地である。この町は1万5千人の住民が住み、多くの長く、直角に交わる通りを持っている。古い城〔松本城〕は町の北部に立っている。松本は犀川の東方に、それからかなり離れて、標高634 mの高さにある。この高さは、信濃・飛驒雪嶺山脈〔Rein, 1875〕と、かの山脈〔筑摩山地〕—和田峠によって千曲川と犀川の間に分水界を形成し、その中で際立って聳^{そび}える山頂として鉢伏山〔1,928 m〕と Hotukuji^{*3} が略図に示されている—との間に犀川に沿って広がる平野全体の平均的高さに相当する。

松本からは、北東へ千曲川溪谷の上田に向かう街道、北方へ有名な寺町善光寺（長野）へ向かう2番目の街道、そして西方へ飛驒の主都、高山へ向かう3番目の街道が、それぞれ通じている。最後の街道は乗鞍岳（鞍の山）の北の飛驒峠〔安房峠〕で山脈を越える。〔飛驒峠の〕高度は相当高いに違いない。なぜなら、7月26日でも犀川の谷からその峠の上になお多くの雪が見られるから。

洗馬から3里離れている村井に着く前に、すでに巨大な山脈の多くの部分がはっきりと姿を現わしている。すな

わち、北西方の背景には切り立った鋭い鋸状の山頂が認められ、それから数多くの雪渓が下りて来ている。人々はそれを飛驒の高山と呼ぶ。この美しい山脈はすべて犀川に向かって急角度に傾斜し、そして、少なくともその前山では、頁岩〔美濃帯の堆積岩コンプレックス：Otsuka, 1988〕と結晶質岩〔花崗岩類〕から構成される。そのために、川の礫の多くは最近の山崩れに由来する黄褐色の裸の状態を示すが、それ以外のすべての礫は美しい緑〔苔〕で蔽われている。高い山頂と鋸状尾根*4はおそらく、主としてまたは一括して、火山噴出物であろう。

松本は豊かな町という印象を与える。それは養蚕の豊かさのおかげであるが、しかし、なによりもここで蚕の飼育について知るために、我々は主なルートからの寄り道をしなければならなかった。カイコガの繭すなわちヤママユ (*Bombyx yama-mai*) 一美濃の加納におけるその利用についてはすでに述べた一は、日本では誤った報告の結果、一般に考えられるよりもはるかに従属的な役割しか演じていない。それはとくに信濃の国の山腹で得られるもので、ここでは蚕の飼育が大抵野外で営まれている。幼虫の飼料植物としては、*Quercus serrata*, Thbg.〔コナラ〕すなわち日本語のクヌギが用いられ、クヌギすなわち落葉のカシの仲間は灌木を作る目的で栽培されている。山繭すなわち山の繭は日本では野生ではどこにも存在しない。松本の近傍では、人々はとくに犀川左岸の丘陵地である松川地方〔現北安曇郡松川村〕でその生産に従事している。この区域の松川組は15の村落に広がり、ヤママユ(繭)生糸の生産と利用を特別の使命として行った会社(組)である³⁾。

村井の近辺では広大な土地が薬用植物の栽培に供されており、我々はそのなかでもウイキョウ (*Foeniculum vulgare*)、センキュウ (*Angelica refracta*) およびコガネバナ (*Scutellaria macrantha*) を強調したい。

ここ〔村井〕から松本までの道は1里28町、中山道の塩尻駅までは3里である。街道は一様に、しかしゆっくりと上り、小さな町塩尻そのものがすでに標高930mの高さにある。

<洗馬・塩尻>

洗馬から塩尻までの中山道区間もまた3里の距離がある。この区間は、略図に示したように、大門で石灰岩採石場*5の前を通る。ここで他の場所と同様に採石される石灰岩は、建築目的に用いられるのではなく、焼成され、それから稲田に散布するための肥料として、実際にイネ苗の移植が行われるときに使用される。

洗馬と大門の間の平出の近くには、街道の左手に古い合

戦場が見られる。ここでは、有名な武将である武田信玄一嫡男として父である甲州(甲府)の大名〔武田信虎〕から支配権を剥奪し、戦に明け暮れた一が、16世紀中葉、日本における流血と破壊的内乱が日常茶飯事であった時代に、越後から侵攻して来た小笠原〔長時〕の軍と戦った。

<塩尻峠>

「塩尻からは、ゆっくりと上る谷が塩尻峠〔現塩尻峠より約1km北方の地点〕へと導く。峠のすぐ南には比高20mの丘陵〔標高1,061m〕があり、そこからは、日本の山岳地帯の同じ標高の他の地点ではほとんど提供できないような広い展望を楽しむことができる。」(クニッピング; 以下同じ)

「峠の麓には魅惑的な諏訪湖が横たわり、その北岸は村落が散在する豊かな斜面によって区切られ、その斜面を通して街道は低川〔原文ではTagawa〕を渡り、下諏訪に通じている。湖の向こう側には、山間凹地(甲州への道)を介して富士山〔原文ではFuji-no-yama〕が、その左側には八ヶ岳(8つの尖頂を持つ山)の巨大な山塊が、さらにその北方にはそれと同じ山脈に属する蓼科山〔原文ではTateshino〕が見られる。南方には甲州・駿河・遠江・信濃〔の国々を〕を互いに分ける荒々しい山地〔赤石山地〕に聳え立つ多くの高い山頂が、我々のよく知っている駒ヶ岳〔木曾駒ヶ岳〕と御嶽が、そして最後に北西方には雪を被った信濃・飛驒国境山脈が見られる。この山脈の険しい尖頂の中では、正当にも槍ヶ岳(槍の山)と名付けられた山頂がとくに注目される。それは私がよく知っている唯一の日本の山であり、当地の風景画家はその山のあまりにも険しい斜面を大いに気に入ったのであった。」

「残念ながら、とくに風景美をより長く楽しむために心惹かれる地点は、通常測量のためにも最も重要なところであり、そのため短い測量期間ではこの2つ〔測量と風景美〕をうまく両立させることができない。しかし、天候に恵まれてこの峠を越える者、そして時間を惜しまない者は、この地点からのすばらしい眺めに喜んで1時間を費やすだろう。」

<下諏訪>

「諏訪湖からは西に天竜川が流出するが、それは和田峠に登って初めて見ることができる。下諏訪は有名な温泉⁴⁾を持つ大きな町である。示された高度〔地図では標高796m; 正確には759m〕は、オーベルシュタット〔ドイツチューリンゲン州の小村: 標高430m〕の高度に相当する。」(クニッピング; 以下同じ)

「我々はすでに街道上のそこここで、この日を楽しみにして、お祝い衣装でお祝い気分にいる多くの地元の人たちに注目していた。家の主人はたくさんの客の話相手となり、かつ非常に多忙であった。音楽と歌声が家々から鳴り響いていた。このような機会には、家族あるいは知人仲間のような小さな集まりが一部屋を借り切り、酒（日本酒）と菓子、魚とあらゆる種類のご馳走が食卓に載せられ、そして許されるならば、自分の三味線を持った女歌手（芸者）が呼ばれる。とくに爛酒を飲んで、それが効き始めてくると、ますます上機嫌となり、効きめを強めるために出席者は次第に歌に合わせて手を叩き、ヨーロッパ人の耳を麻痺させる騒音をもたらす。」

「酒の消費は、多くの大小の酒屋があることから判断すると、非常に重要なことであるに違いない。酒に酔った人はじきに赤ら顔になることでわかり、それは顔全体のみならず、額やこめかみ、喉および頸にまで及ぶ。日本全般に普及しているこの飲物に関する外国人の意見は大きく分かれる。私には消耗する一日行程の後にいつも1壇びんのおいしい酒が与えられた。我が国のビールの場合とたしかに同じように、初めだけはその味に慣れなければならない。そして小さな村ではよい酒は期待できない。」

下諏訪およびその近くにある3つの神道の聖地^{*6}は高い名声を保っており、晩夏には、温かい温泉場と同じく、信濃国からの多くの来訪者を引き寄せる。もっとも有名な宮（神社）⁵⁾は上（神）諏訪の大明神を祭っている。そして下諏訪〔諏訪大社下社秋宮〕のほか、和田峠に向かって上って行く街道の左手に同様に〔諏訪大社下社春宮〕がある。〔春宮に向かう〕長い階段の並びは、美しい社におけるその位置が特別に選ばれたものであることを示している。

<諏訪湖>

信濃国の諏訪湖あるいは諏訪の湖水（諏訪の丸い湖）は、下諏訪から8町の距離にあり、標高約800m〔正確には759m〕である。それは約4分の3（地理）マイル〔1地理マイル＝7,412.7m〕の長さ、同じくらいの幅を持ち、釜状凹地を取り囲む周りの山々からの多くの小河川を集め、そして流出口である天竜川をその西端に持つ。天竜川は、初めは南西方向に信濃を横断し、それからずっと南に向かって遠江を横断し、見付〔磐田市見付町〕と浜松の間で、東海道の下方で遠江灘とおとうみなだ えんしゅうなだ〔遠州灘〕に注ぐ。

1月と2月、諏訪湖は厚さ1尺以上の氷の層におおわれる。その平らな岸辺には、ヒルムシロなどの水生植物の幅広い地帯があって、湖の深さが浅いことを示している。

そして事実、少なくとも下諏訪の近くでは、足が湖底に着くよりも前に、泥土の中をずっと徒渉しなければならない。この湖がかつては非常に広大であり、北西に広がる美しい稲田も包含していたことは明らかである。湖岸の後退はその流出口である天竜川が次第に深くなることによって簡単に説明される。諏訪湖は琵琶湖で述べたのと同じような種類の魚類を宿している。

諏訪湖の東岸にはきれいな町、高島があり、そこには、塩尻峠から富士山が見られる方向に、下諏訪から甲府までの18里の長さの街道〔甲州街道〕が通過している。高島にはかつて大名、諏訪因幡守〔忠誠〕^{ただまさ}が居住していた。1868年夏、朝廷支配の王政復古〔軍〕と徳川および將軍の部下たちとの間に起きた戦いの期間に、土佐の軍がこの街道を甲州（甲斐）に向かって押し出し、わずかな苦勞でその首府甲府を略取した。

<和田峠>

下諏訪から中山道は北東へ向きを変え、ずっと山を登り、そして3里の行程の後、街道の最高点、標高1,646m〔正確には約1,600m〕の和田峠に到着する。

下諏訪から〔砥川の〕上流へ約半時間のところにはなおグレーワッケ片岩〔御荷銚緑色岩類：中野ほか（1989）〕が露出しているが、それからは溶岩と凝灰岩^{*7}〔原文ではLavatuff〕が頂上まで続く。峠の手前、半時間のところにある下の茶屋に到着する前に、この凝灰岩は街道の左側で成層し、〔溶岩は〕柱状節理を示している。地層は走向北65°東で20°傾斜する。〔溶岩の〕小さな柱は大抵五角形で、淡灰色を呈し、緻密で、〔叩くと〕高い音がする。下の茶屋に続いて何軒かの茶屋があり、それらは合わせて西餅屋の名前で呼ばれ、峠の反対側の東餅屋と同じように、そこで客に振舞われた小さな種類の菓子の名〔餅〕にしたがって名付けられている⁶⁾。

1864年、日本が激動状態になり、將軍に対して、また外国人に対する彼の優柔不断な態度に対して、反発が広がったとき、西餅屋の近くで水戸藩の浪士たち〔天狗党〕と松平丹波守・諏訪稲葉守（それぞれ、松本藩と高島藩の大名）の軍隊との間で流血の衝突が起こった。その衝突の中で後者は浪士（主を持たない侍）たちの進路を遮断した^{*8}。その結果、浪士たち〔原文では後者となっているが、前者の間違い〕は中山道に沿って京都に向かって、そして帝のために行くという彼らの意図を放棄せざるを得ず、越前に庇護を求めることになった。

和田峠と周りの樹木のない鞍部および円錐丘—特別に高く聳えてはいない—は、美しい草原におおわれており、そ

こを越えるときにはザンクトガレン地方およびアッペンツェル地方〔いずれもスイス東部〕のすばらしい牧草場が思い出される。

より良き眺めを得るために、我々は峠（北方へ約半時間のより高い山頂でさらに多くの遮るものがない広いパノラマが見られる）の南東方向の小丘〔標高 1,657 m〕に登り、ここで驚くべき大規模なそして興味あるパノラマを楽しんだ。北 55° 東には浅間山、南 70° 東のすぐ近くには蓼科の火山性山頂が、さらに右の 16-17° 南西には長い山稜を持つ八ヶ岳が聳えている。さらに南西には 22° 下方に諏訪湖の美しい盆地の眺望が、さらに南 42° 西には駒ヶ岳のギザギザした山稜が、そしてさらに右側には御嶽の長い山稜、それから北 50-60° 西には信濃・飛騨山脈中の急崖をもって聳える巨大山岳の大部分が見られる。そしてまたここから美しい依田川〔原文では Oigawa〕谷を数マイルにわたって目視し、それによって少なくとも街道がここから辿る方向を知ることができる。

原注

- 1) クニッピングは「白沢」と書いている。
- 2) 1878年に横浜の「ジャパンメール」〔1870年～1917年に横浜で発行された週刊英文新聞〕は、信濃、飛騨および越中を通る旅行についての長大な報告を載せた。それは多くの類似の著作に比較して、私の知らない著者の高度に学術的な出版物であり、それらの地方に関する我々の不完全な知識に対する非常に価値ある貢献と見なされるに違いない。
- 3) この話題に関する詳細は、マールブルク自然科学振興協会会報 1877, 60-68 [Rein, 1877] に見られる。
- 4) それは温度 48°C の弱硫黄泉であり、本陣近くの町中にある。
- 5) 宮（神社）に対して、仏教の寺院は寺と呼ばれる。その寺への道は山門、すなわち屋根付きの門を通っている。
- 6) Nishi=西、Higashi=東。Mochi=グルテン質の米粉から作られる小さな丸い菓子。ya=家、すなわち、Cha-ya=茶屋のように、家のなかで営まれる職業の名前のための接辞。

訳注

- *1 日本の三大河は、幹川流路延長では 1 位信濃川、2 位利根川、3 位石狩川であり、流域面積では 1 位利根川、2 位石狩川、3 位信濃川である（理科年表による）。ラインは信濃川を 2 位、利根川を 3 位としており、1 位を明示していない。
- *2 奈良井・洗馬間の中山道沿いには花崗岩は露出せず、すべて美濃帯の堆積岩コンプレックスからなる。中山道沿いに花崗岩が露出するのは、福島より南方の区間であり、ここでは明らかに花崗岩は上記堆積岩コンプレックスを貫いている（片田・磯見, 1958）。ラインは花崗岩を堆積岩類の基盤としているが、これは当時のヨーロッパにおける古い考えを表したものだろう。
- *3 Hotukuji という山は見当たらない。これと発音のよく似た地名に保福寺峠（松本—上田間を結ぶ東山道の古い峠）および保福寺村（現松本市保福寺町）がある。地図（第 9 図）に示された Hotukuji の地点は、保福寺峠から続く山頂の一つを表しているのであろう。
- *4 松本から見える「鋸状の尾根」は槍ヶ岳—穂高連峰を指している（原山 智氏のご助言による）。同山稜は穂高安山岩類（原山, 1990）からなり、第四紀前期のカルデラ火山噴出物のカルデラ内堆積物である（Harayama, 1992）。この山稜を遠望して火山噴出物としたのは、まさにラインの卓見と言わねばならない。

- *5 塩尻市上西条の善知鳥山の石灰岩。美濃帯堆積岩コンプレックス（Otsuka, 1988）中の厚いペルム紀石灰岩（片田・磯見, 1964）である。
- *6 下諏訪には諏訪大社下社春宮と同秋宮があり、上諏訪には諏訪大社本宮がある。
- *7 更新世前期の塩嶺火山岩類（中野ほか, 1998）に相当。同岩類上部の和峠流紋岩（山崎ほか, 1976）は黒曜石を産することで有名である。
- *8 実際には西餅屋下流の樋橋に陣を引いた両藩の軍隊に対して、天狗党は山を迂回して襲い掛かり、激戦の末にこれを撃退した（児玉, 1986; 吉村, 1994）。このあと、天狗党は下諏訪・岡谷を通過して伊那谷に入り、飯田から清内路峠・馬籠峠を越えて美濃の国に入り、揖斐川から越前へと向かった（同上）。

謝辞：松本市村井付近から「鋸状尾根」（槍—穂高連峰）が遠望されることを教えていただいた元信州大学教授の原山 智氏に厚くお礼申し上げます。

文 献

- 原山 智（1990）上高地地域の地質。地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅）、地質調査所、175p.
- Harayama, S. (1992) Youngest exposed granitoid pluton on Earth: Cooling and rapid uplift of the Pliocene-Pleistocene Takidani Granodiorite in the Japan Alps, central Japan. *Geology*, **20**, 657-660.
- 片田正人・磯見 博（1958）5 万分の 1 地質図幅「上松」および同説明書。地質調査所、38p.
- 片田正人・磯見 博（1964）5 万分の 1 地質図幅「塩尻」および同説明書。地質調査所、54p.
- 児玉幸多（1986）中山道を歩く。中央公論社、東京、434p.
- 中野 俊・竹内圭史・加藤碩一・酒井 彰・濱崎聡志・広島俊男・駒沢正夫（1998）20 万分の 1 地質図幅「長野」。地質調査所。
- Otsuka, T. (1988) Paleozoic-Mesozoic sedimentary complex in the eastern part of the Mino Terrane, central Japan and its Jurassic tectonism. *Journal of Geosciences, Osaka City University*, **31**, 63-122.
- Rein, J. J. (1875) Dr. Rein's Reise in Nippon, 1874. *Petermann's Mittheilungen*, **21**, 214-222.
- Rein, J. J. (1877) Ueber Zucht und Bedeutung der Antheraea Yama-mai in Japan. *Sitzungsbericht der Gesellschaft zur Beförderung der gesammten Naturwissenschaften zu Marburg*, 1877, 60-68.
- Rein, J. J. (1880) Der Nakasendo in Japan, nach eigenen Beobachtungen und Studien im Anschluss an die Itinerar-Aufnahme von E. Knipping und

mit Benutzung von dessen Notizen. *Petermann's Mittheilungen, Ergänzungsheft*, No. 5, 38p.

山崎哲良・小林哲夫・河内晋平（1976）長野県和田峠付近の地質と岩石. 地質学雑誌, **82**, 127-137.

吉村 昭（1994）天狗争乱. 朝日新聞社, 東京, 451p.

YAMADA Naotoshi and YAJIMA Michiko (2018) Japanese translation of "Der Nakasendô in Japan" (Rein, 1880), Part 5—Crossing Shinano (2) From Torii-toge to Wada-toge—.

(受付: 2018年6月18日)